

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 18 日現在

機関番号：21403

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370165

研究課題名(和文) 冷戦初期のアメリカにおける日本古美術展覧会についての調査研究

研究課題名(英文) Exhibitions of Japanese Antiquities in the United States during the early Cold War

研究代表者

志邨 匠子 (Shimura, Shoko)

秋田公立美術大学・美術学部・教授

研究者番号：00299926

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、冷戦初期にアメリカで開催された日本古美術展、すなわち1949年シアトル美術館日本美術展、1951年サンフランシスコ日本古美術展、1953年アメリカ巡迴日本古美術展の3件の展覧会に焦点を当て、各々の出品経緯、出品作品の同定、現地における批評を調査、分析をおこなった。その結果、あえて日本美術と中国美術との差異を強調する評論から、共産主義を牽制する冷戦下の日米文化外交としての側面が明らかになった。

研究成果の概要(英文)：In this study, I focused on three Japanese art exhibitions held early in the Cold War in the United States, namely, "A Survey of Japanese Art" at the Seattle Art Museum in 1949, "Art Treasures from Japan" at the M. H. de Young Museum in San Francisco in 1951, and "Exhibition of Japanese Painting and Sculpture," which traveled to five prominent American museums in 1953. I analyzed the historical context of these exhibitions, the works of art exhibited, and the ensuing critical responses in the U.S. This comparative analysis revealed how American reviewers made important critical distinctions between Japanese art and Chinese art, which strongly reflected U.S.-Japan Cold War diplomatic relations and governmental efforts to contain communism.

研究分野：日本近代美術史

キーワード：冷戦 日本古美術展覧会 日米美術交流

1. 研究開始当初の背景

近年、冷戦初期の日米文化関係については、アメリカの対日文化政策研究を中心におこなわれ、日本の対米文化政策を扱った研究は、戦前・戦中を対象にしているものがほとんどである。確かに、戦後、被占領国となった日本の対米政策は政治的にはあり得ない。しかし日本美術、ことに古美術は、対米関係を良好に押し進めるための、ひとつの外交手段となり得たと考える。

本研究では、1949年から53年、つまり占領期から冷戦初期に焦点を当て、日米両国の視点から、対米、対日の文化政策について考察する。稿者はこれまでアメリカにおける日本美術受容について研究を続けてきた。本研究はこうした研究の延長線上にあり、アメリカが、ソ連や中国といった共産主義国を牽制する中で、日本美術が日米両国の国家イメージにどのような作用したのか、という点に着目したものである。

2. 研究の目的

研究全体の構想は、冷戦期の日本とアメリカの美術交流の実態を明らかにすることである。その中で、本研究では、冷戦の初期にあたる1949～53年にアメリカで開催された3件の日本古美術展覧会について、以下の3点の視点を中心に、調査研究おこなった。

(1) 各展覧会の出品作品の同定と出品経緯、出品意図

(2) アメリカにおける各展覧会の評価、および作品の評価

(3) GHQによる美術行政と主権回復後の日本の美術行政

この3点の視点から調査研究することにより、冷戦初期、日本の古美術が日米両国の文化政策にどのように関わったのかを明らかにすることを目的に据えた。

3. 研究の方法

本研究では、上記の目的を達成するために、3年の研究期間を設定し、以下のように研究をすすめた。

・国立国会図書館等において、日本側の出品経緯、出品作品の同定、出品意図についての調査

・アメリカ議会図書館、アメリカ美術公文書館において、各展覧会の評価についての調査
・ナショナル・ギャラリー(ワシントンDC)、シアトル美術館において、開催美術館に関する調査

・日米双方の資料調査から、展覧会の意図と反響、影響についての総合的な考察

・上記の結果を、冷戦構造等、当時の社会・政治情勢との関連から考察

4. 研究成果

本研究で対象とした古美術展は、以下の3件の展覧会である。

(1) シアトル美術館日本美術展(1949年)

(2) サンフランシスコ日本古美術展(1951年)

(3) アメリカ巡回日本古美術展(1953年)
以下にその研究成果を記す。

(1) シアトル美術館において、展覧会冊子(図録は制作されなかった)を調査することにより、これまで詳細が不明であった主要な出品作品を確認することができた。また同美術館の内部資料や当時の新聞・雑誌に掲載された現地の批評を参考に、展覧会の経緯や意味について考察した。

出品作品は、仏教美術、やまと絵、水墨画、能面、茶の湯、庭園、装飾派、陶磁、版画、桃山・徳川時代、民芸、花道の12のカテゴリーに分類され、350点を超える総合展示であった。同館所蔵作品に加え、アメリカ国内の美術館や個人コレクター、日本からは東京国立博物館から4点、個人コレクターから10点の出品が確認された。

この展覧会は、シャーマン・E・リーの企画によるものである。リーは、占領下の東京で、GHQ/SCAPのCIE(民間情報教育局)美術記念物課で美術顧問官として勤務し、1948年6月、シアトル美術館に副館長として迎えられていた。リーは展覧会冊子に「日本美術は、しばしば、中国美術の不十分な反映であると言われてきた。この展覧会の目的は、その反対であること、そして世界の美術に対する日本独自の貢献を示すことである」と記し、展覧会の主眼を、アメリカ人に、日本美術は中国美術の単なる模倣ではないこと、その独自性を認識させることにおいた。また展覧会冊子において、リーは、日本美術を網羅的に紹介しているが、特に貞観彫刻、鎌倉時代の絵巻、琳派、瀬戸焼に日本美術の固有性を見出している。

一方、シアトル美術館の学芸員で画家のケネス・キャラハンは、1949年11月27日の『シアトル・タイムズ』において、「日本美術は、ほとんど常に装飾性と関係している。形状と機能から切り離された、装飾のための装飾であることはほとんどない。それは、屏風、版画、陶磁器の皿、漆の箱、刀、彫刻などに見出される。日本の文明は、過去1500年にわたって発展してきたが、美術は徐々に装飾的になり、それに呼応して活気が失われ、19世紀に至って、時に全体の調和よりも表面に関心を払い、細部の仕上げに集中するようになった」と述べ、日本美術の特徴として装飾性をあげ、これを否定的に捉えている。こうしたジャポニスム的な価値観が、当時であってもみられる事が確認された。したがって、日本の固有性を装飾性のみ見出すのではなく、日本美術の総体を示そうとするリーの視点は、ジャポニスム的な価値観と一線を画すものであったと言える。

そしてその視点は、1951年のサンフランシスコ日本古美術展に引き継がれた。サンフランシスコ展でも、やはり古墳時代から近世

までの絵画、彫刻、工芸を含む総合的な展示がおこなわれたからである。また 1953 年のアメリカ巡回日本古美術展は、サンフランシスコ展が契機となって開催された。この意味で、シアトル展は、戦後の日本古美術展の先駆的な意味をもっており、リーの視点もまた、日本美術受容を考えるうえで、重要な位置を占めている。

(2) この展覧会については、すでに出品作品についての調査は終えていたが、今回のアメリカ議会図書館での調査により、新聞・雑誌における批評をあらたに収集することができた。

地元紙『サンフランシスコ・クロニクル』(9月3日付)は、国務長官補佐官のジョン・フォスター・ダレス夫妻とアチソン国務長官夫人が、展覧会場に訪れたことを報じている。これは当時文化関係顧問であったロックフェラー三世が、ダレスに提出した報告書を受け、ダレス自身が、展覧会のオープンに先立って、作品を観覧したことを裏付けている。

同紙は9月16日に、日本古美術展の特集記事を組み、この展覧会が前年、前々年に開催された、ベルリン、ウィーンからもたらされたヨーロッパの至宝展と同様の入場者数があることを伝えている。また記者は、視覚芸術は、西洋と東洋の間に立ちはだかる障壁を乗り越え、コミュニケーションを可能にすると述べている。その例として、雪舟および池大雅の作品とトーマス・ダウティ(19世紀前半に活躍したハドソン・リバー派の画家)の作品に共通点を見出し、日本とアメリカの美学に大きな隔たりはないとしている。

その他では、印象主義的な作例として長沢芦雪、与謝蕪村、青木木米をあげている。また懐月堂安度の肉筆美人画には幾何学的抽象、伊藤若冲の『動植綵絵』の内《群鶏図》については、混乱し過剰な自然主義、渡辺華山の《市河米庵像》には堂堂とした肖像画、菱川師宣の《歌舞伎風俗図》には、生き生きとしたリアリズムを見ている。また記者がもっとも印象に残った作品は、円山応挙の《波濤図》12幅であった。

記者は、日本美術は固有性があると同時に、アジアや西洋からも影響を受けているとし、「つまり、この展覧会では、他国の美術展と同程度に、美德と悪徳、依存性と自律性が示されている。だからこそ本物なのだ」と結論づけている。

他の批評とも共通して言えるのは、アメリカ人にとって、日米安全保障条約を締結した相手国である日本は、野蛮で理解不能な国ではなく、高尚な文化を有した文明国であるとする視点である。

今回、現地の新聞評を分析することで、『アートニュース』等の美術雑誌にみられるような専門的な評論ではなく、一般的な日米の関係性に言及した記述を見出すことができた。『サンフランシスコ・クロニクル』紙は、連

日のように、サンフランシスコ講和条約について報道しており、その渦中に日本古美術展の記事は掲載され、上記の特集が組まれている。新聞の読者も、そして展覧会を訪れた鑑賞者も、政治的な問題意識の中で、日本美術を見ていたことを確認した。

(3) この展覧会は、アメリカの5都市の美術館、すなわちナショナル・ギャラリー(ワシントンDC)、メトロポリタン美術館(ニューヨーク)、シアトル美術館、シカゴ美術館、ボストン美術館を、1年にわたって巡回した日本古美術展である。今回、最初の開催館であるナショナル・ギャラリーのアーカイブで、まとまった資料を調査することができた。その中には、当時の新聞雑誌から関連記事を集めたスクラップがあり、ここから主要な批評を確認した。

この展覧会には、69件の国宝・重要文化財を含む91件が出品された。展覧会の経緯や出品作品の同定等については、すでに久保いく子氏の論考(「矢代幸雄とアメリカ巡回日本古美術展覧会(1953年)『近代画説』12号2003年12月」)がある。したがって、本研究では、今回の調査で知り得た新たな情報や資料をもとに、経緯についての再考と、現地での批評から、日本の古美術がどのように受容されたのかについて考察をおこなった。

まず経緯について述べる。久保はこの展覧会は矢代幸雄の発案によるものとしていたが、稿者は、国会図書館憲政資料室に保管されている占領期の資料から、1949年にアメリカですでに主要都市を巡回する大規模な日本美術展を開催しようとする動きがあったことを指摘した。まず1949年6月、コロンビア大学の日本学者で、1945年12月までGHQのCIE教育課長を務めたハロルド・G・ヘンダーソンは、自身の後任で当時CIE局長の地位にあったドナルド・ニュージェントに、アメリカでの日本絵画展開催を提案する手紙を送っている。ヘンダーソンの提案とは、藤原時代から現代までの国宝が同等クラスの絵画約100点を、ワシントン等アメリカの主要美術館を巡回させるといったものであった。これに対し、ニュージェントは、当時CIE内に美術の専門家が不在であることなどを理由に、この提案に直接関わることは出来ないと回答した。同年10月には、マッカーサーに、アメリカで雪舟を中心とする日本絵画の展覧会を開催したいとの手紙が送られた。結局、この展覧会は実現されなかったが、手紙を送った「雪舟展開催委員会」には、作家のパール・バック、思想家のジョン・デューイ、ヘレン・ケラー、イサム・ノグチの他、デ・ヤング美術館長のウォルター・ハイル、元駐日アメリカ参事官ユージン・ドゥーマンが名を連ねていた。翌1950年2月、ドゥーマンは、吉田茂首相に書面で、国宝級の日本美術展覧会を、ボストン等の主要都市で開きたいと申し入れている。しかしこの時吉

田は、講和条約締結前ではまだ機が熟していないという理由で、これを謝絶した。

以上のように、アメリカの主要美術館で日本絵画展あるいは日本美術展を開催したい、という動きがアメリカ側にあったことがわかる。また当初、1951年のサンフランシスコ展を、シアトル、ロサンゼルス、ハワイを巡回させたいという要望があり、その後は、サンフランシスコの他に、シアトル、シカゴ、ボストン、ワシントン、ニューヨークが巡回先の候補地として検討されていた。サンフランシスコ展の当初の開催候補地として、これら5都市が検討されたのも、こうした一連の流れと関係がある。そして1953年の巡回展で、ついにそれが実現したと考えられる。

次にアメリカでの評価について述べる。この展覧会の最大の目的は日米の「友好」であった。英文カタログの序文には、主催者であった文化財保護委員会の委員長、高橋誠一郎もナショナル・ギャラリー館長のディヴィッド・E・フィンレーも“good will” “friendship”という言葉を用い、また日本大使館からのプレスリリースに掲載されたアメリカ大使、新木栄吉の声明の最後も、「この展覧会は、それ自体がアメリカと日本の親善（amity）の証であり、これが相互理解と友好（good will）を進めるために、今後、もっとも有益になるに違いないと確信しています」と締めくくられている。友好や親善という大義ために企画された巡回展は、日本でも一堂に見ることができないような名品が集められ、総じてアメリカでの評価は高かった。

最初の巡回地ワシントンでは、オープン初日に25,000人が訪れたと、1月26日の『ワシントン・ポスト』は報じ、伎楽面と《過去現在因果経》、雪舟《秋冬山水図》「秋景」の写真を大きく掲載した。他の主要新聞も、ワシントンで巡回展がはじまったことを大きく取り上げている。たとえば『ニューヨーク・タイムズ』（1月25日付）は、“The Best From Japan”という見出しをつけ、《絵因果経》、《鳥獣人物戯画》、雪村《風濤図》、《稚児大師像》、可翁《寒山図》、円山応挙《雪松図》、長谷川等伯《猿猴竹林図》、《弥勒菩薩半跏像》（7世紀）の写真を掲載した。ボストンの『クリスチャン・サイエンス・モニター』（1月30日付）も、《伝源頼朝像》、雪舟《秋冬山水図》の「秋景」、《観音菩薩像》（6-7世紀）、《松に草花図屏風》（16世紀）の写真を大きく掲載し、《絵因果経》、《平治物語絵巻》、《鳥獣人物戯画》、《伝源頼朝像》、雪舟作品、《南蛮屏風》について詳細に論じた。ワシントンではオープンから5日間で45,000人の来場者を数え、ナショナル・ギャラリーで開催された4年前のドイツ美術展を上回ったという。

巡回展における批評の特徴を2点あげておく。1点目は、日本美術の独自性への着目、特に中国美術との差別化、2点目は、水墨画への関心、あるいはその抽象性への言及であ

る。

1点目については、たとえば東洋美術史家のアラン・プリーストは、「日本の文明や美術は、中国の文明や美術とは別物」であり、日本美術の「簡素さ」こそが中国美術との差異だと指摘している。（Alan Priest, “An Exhibition of Japanese Painting and Sculpture,” *Artibus Asiae*, vol.16, no.1/2, 1953, p.122 ; Alan Priest, “A Note on Japanese Painting,” *Metropolitan Museum of Art Bulletin*, vol.11, no.8, Apr. 1953, p.201-202.）

2点目については、たとえば『ニューヨーク・タイムズ』の記者は、「墨による灰色から黒への無限の濃淡」に言及し、「西洋美術において“抽象”（abstraction）という言葉が議論される数世紀も前に、単純化と暗示によって事実上の抽象化をおこなっていた」と述べている。（Howard Devree, “Treasure of Japan, Sheer Beauty Dominates Metropolitan Show,” *New York Times*, Mar. 29, 1953.）

またシャーマン・リーも「抽象」（abstract）と、「暗示」（suggestive）に言及している。（Sherman E. Lee, “The Creative Art of Japan,” *Art Institute of Chicago Quarterly*, vol.47, no.3, Sep. 1, 1953, p.52.）

中国美術との差別化は、すなわち日本と中国との差別化であり、共産圏を牽制する当時の冷戦構造を如実に反映している。中国絵画からの影響が強い水墨画すら、その影響を強調しすぎている、と批評された。

巡回展は、アメリカで日本美術展を開催したいという、ヘンダーソンやドゥーマンといった一部の専門家や親日家と、冷戦構造を意識した日米関係を築こうとするダレスやロックフェラー三世の意向が合致し、「友好」という大義のもとに実現した。出品作品の選考にあたった日米の美術史家たちは、作品の質を重視し、結果として、その大義にかなう作品群がアメリカに渡った。展示や活発な報道を通じて、アメリカ人は、国家として独立を果たした日本に、美術の上でも独自性を見出そうとし、日本を「友好」関係を築くにふさわしいパートナーとみなしていたと言える。

上記3件の冷戦初期の展覧会との比較のために、戦前アメリカで開催された日本古美術展として、1936年のボストン美術館日本古美術展について、調査をおこなった。

この展覧会は、戦前の海外日本古美術展としては、日英博覧会（1910年）以降では、ベルリン日本古美術展（1939年）に先立つもので、アメリカにおける日本古美術展としては、戦前では最大規模のものである。

出品作品は、絵画82件、仏像14件、狛犬1件（1対）、伎楽面1件（2面）、厨子模型2件の計100件（102点）で、ジャポニズムで人気を博した浮世絵や工芸が一切含まれていないことが挙げられる。選定にあたったボストン美術館の富田幸次郎が、岡倉天心の薫

陶を受けていたこともその原因のひとつであろう。なぜなら、たとえば天心は『東洋の理想』(The Ideals of the East, 1903)において、浮世絵は「日本芸術の基礎である理想性を欠いている」と述べ、ジャポニズム的な価値観を重視していなかったからである。

出品作品のうち、御物からは、若沖の《動植緑絵》2幅、妓楽面2点が出品され、当時の国宝、いわゆる旧国宝は、《佐竹本三十六歌仙切》と《長谷雄草紙》の2件で、いずれも現在は重要文化財に指定されている。重要美術品は25件出品されている。出品作品は、7世紀から11世紀までの仏像、《源氏物語絵巻》《信貴山縁起絵巻》の模写、《鳥獣戯画残缺》といった12世紀の絵巻、12世紀から14世紀の仏画、雪舟や雪村等の15、16世紀の山水画、元信、永徳、探幽らの狩野派、光悦、宗達、光琳、抱一等の琳派の流れ、岩佐又兵衛の風俗画、光起の土佐派、蕪村の南画、若沖や応挙、祖仙等の写実的な花鳥画の作例など、ほぼ日本美術史の代表的な作例を網羅し、日本美術の概観を示そうとする意図がうかがえる。

『ニューヨーク・タイムズ』は、1936年9月6日(日曜版)に3面にわたり、矢代幸雄による記事を掲載した。矢代は、浮世絵版画のみが日本美術として受入れられている現状から、多様な日本美術を分かりやすく解説しようとしている。ボストン展は、出品作の選定に困難があり、作品の質は、日英博にもベルリン古美術展にも遠く及ばなかった。しかしアメリカ人の浮世絵中心の日本美術理解を払拭し、日本美術が中国美術の単なる傍系でないことを示すための布石になったと思われる。その理念は、戦後のシアトル日本古美術展(1949年)やサンフランシスコ日本古美術展(1951年)、アメリカ巡回古美術展(1953年)にも通底している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

志邨匠子「ボストン日本古美術展(1936年)と矢代幸雄の日本美術論」『秋田公立美術大学研究紀要』(査読無)第4号 2017年3月 pp.17-26.

志邨匠子「冷戦下の1953年アメリカ巡回日本古美術展」『秋田公立美術大学研究紀要』(査読無)第3号 2016年2月 pp.27-38.

志邨匠子「シアトル美術館日本古美術展覧会(1949年)について」『秋田公立美術大学研究紀要』(査読無)第2号 2015年3月 pp.11-21.

志邨匠子「1949年の雪舟展計画」『近代画説』(査読無)第23号 2014年12月 pp.71-85.

〔学会発表〕(計1件)

志邨匠子「1950年前後のアメリカにおける日本古美術展について」明治美術学会総会 2015年12月12日(早稲田大学、東京都)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

志邨 匠子 (SHIMURA Shoko)
秋田公立美術大学・美術学部・教授
研究者番号: 00299926

(2)研究分担者

()

研究者番号:

(3)連携研究者

()

研究者番号:

(4)研究協力者

()